

# 在宅診療を経験して

滋賀県 竜王町国保診療所

野 冽 義 則

自分の子どもたちに買った、小学生向けの百人一首の本を見てみると、不勉強な自分には初めて知るところも多く、興味深く楽しめました。その中で、西行法師の有名な歌が紹介されていました。

ねがはくは花のもとにて春死なむ  
その如月の望月のころ

死に向かい合う堂々とした潔さですがすがしく伝わり、死の印象とかけ離れた春の美しい風景が目に見え、心でこの歌に強く惹かれました。八百年以上前と現代とは医療水準や平均寿命も比較にならないほどの差がありますが、人間が死に對峙する時の心の持ちようは普遍的なものであると感じました。

私は国保診療所に勤務して、今年で九年目です。在宅診療を行い、自宅で最期を迎えられる方を多く診てきました。食欲不振で衰弱してきた九十歳過ぎの女性は、どんなことがあっても病院には絶対行かないと言うので、自宅で点滴を始めました。三日目の点滴を始めたとき、はつきりとした口調で話されました。

「先生、すまんけどな、もうこんなことしてくれんでもよろしい。たのむさかい早う参らせてほしいわ。」  
家族も、頑固なおばあさんだから、言う通りにしてあげてほしいと希望され、点滴は中止し、その数日後に息を引き取られました。そのほかの方々にも、心に残っている言葉があ

ります。

「何もしていらんけど、息が止まったときはどうかお願いします。」

「もう長いことはない。今までもどうもありがとう。いろいろと気ままばかり言うて、すまんんだ。」

死期を悟ることは、例えば長い人生を経た方であっても、かなりのストレスでしょうが、ご自身で最期を迎える判断ができたことは大変恵まれたことであると思いました。また、死ぬことは決して喜ばしいことではありませんが、幸せな死の迎え方というものはあるのではないかと、これらの方々と接して感じました。

当診療所は近くの特別養護老人ホームの嘱託医も担当しています。そこには認知症や脳血管障害の後遺症を持った方が多く、食べ物をかむことや飲み込むことができなくなっている人もいます。このような場合、「胃ろう」という腹部の皮膚から胃の中への通り道を作り、流動食を注入することで栄養を確保するのか、又は、そのまま自然な衰弱にしたがって看取るのかを家族に選択してもらう必要があります。残念ながら本人に判断する能力はありません。

私がこの施設で経験した中では、胃ろうを作って生命を維持させることを希望されるケースが多かったように思います。施設には五十数名が入居されていますが、十名近くが胃ろうからの栄養を受けています。「このまま何もせず、放っておくのはかわいそうだ」「生きられる方法があるのなら、生きてほしい」など、表現はさまざまですが、肉親の生命の危機に對して、とりあえず何かをせざるにはいられなくなるのでしょうか。生死のかかる決定を短期間に下すことは極めて難しいことです。ただ私が願うことは、周囲の満足からではなく、本人の視点に立った選択をしてほしいということです。単に余命を延ばすことが、その方の人格や人生に敬意を払うことと必ずしも同一とは言えないのではないのでしょうか。

もはや本人からは答えが聞けませんので、何が正しい選択なのかは分かりません。毎週、施設の診療に行く度に、我々は本人が望まないことをひたすら続けているのではと考えてしまいます。自宅で最期を迎えた方々の言葉がとりわけ耳に響いてきます。